

---

# 遠い日々への追憶

碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠い日々への追憶

### 【NZコード】

N3157Q

### 【作者名】

碧

### 【あらすじ】

大切な主一家を護るために戦場で死んだ男の来世はなぜだか主だった人の娘であつた。

前世の記憶を抱えた主人公は少々（所でなく）風変わりな公爵令嬢へと成長する。

## プロローグ

大切な約束をした。

敬愛し、剣を捧げ、守り抜くと決めた方達とした約束。

『必ず戻ります。戻つたら美味しい食い物と酒を持つてオウカの花を皆で見に行きましょう』

俺はその約束を果たせなかつた。

主たる人とその優しい奥方に彼らの間に生まれたご子息。

彼らを護るために戦いでた俺は数えきれない敵を切り伏せそして最期を迎えた。

護り、戦で死んだことに後悔はない。

ただ、心残りがあるならば・・・。

『必ず帰つてこい』

約束を守れなかつたことだ。

そんな心残りのせいだろうか？

死んで輪廻の輪に戻り再び生を受けた俺の転生先は・・・。

父・・・前世、主  
母・・・前世、主の奥方

兄・・・前世、主の「」子息

そして前世で彼らに忠誠を誓った俺の現世はこうと。

「わあ～～～可愛い～～～！」

「お前も兄になるのだから妹をしつかり守るのだぞ」

「はい！」

「あらあら、過保護なお父様とお兄さまですね～～～？」

俺・・・現世、生まれたての公爵令嬢。

そう、なんの因果か俺・・・いや、私は前世の記憶を覚えたまま主  
だつた人の娘として生まれたのだった。

?

ミリアナ・バル・ロー テ公爵令嬢。

それが今の私。

鏡に映るのは黒銀の髪に薔薇色の瞳の恐ろしく整った顔の十歳の女の子の困惑した表情。

前世のくすんだ灰色の髪と瞳、世の中全てを呪うような顔した餓鬼の面影は当たり前だが見当たらない。

”俺”が生きた時代からもう五百年が過ぎている。戦場で死んだ一般兵などこの時代には何一つ遺つてはいない。

”私”の記憶の中以外は。

前世の記憶があるからと言って人格も全て一緒なのかと言つと違つ。

体も性別も環境も違うのだ。いくら前世で男として生きた二十一年間の記憶を持つてもそれらに全て塗り替えられることはない。

”俺”と”私”は違う人間なのだ。

まあ、鮮明過ぎる記憶が”私”的人格形成及び生活に大きな影響を与えてているのは間違いないが。

「ミツ・様！－なんて恰好をされているのですか！」

部屋に入つてくるなり乳母が殺人鬼にでも遭遇したかのよつた顔をした。

私は鏡から視線を外し自分の格好を確かめる。

兄さまのお古であるズボンに清潔な上衣。一般的な貴族の服装だ。どこもおかしくない。

「べつにへんなかつこいつじゃないよ。兄さまといつしょ」

胸を張つて言つたら乳母に半泣きで怒られた揚句、問答無用で女子の服に着替えさせられた。

理不尽な仕打ちだと思つ。

?

私は前世で男であり、戦場を生き抜き、最期を迎えた。剣に生き、剣に死んだと言つていいだろう。

前世で血を吐きながら研鑽を積んだ剣技は魂にまで刻み込まれている。体は覚えておらずとも精神が魂が覚えている。頭が覚えていたことを身体に覚えさせる。

私は模擬刀を持てるようになるや人目を避けつつ日々鍛練に励んでいた。

だが、当然のことながら十の女の子が模擬刀を振り回す姿は異常で見つかれば鬼の形相で追い掛けられた。

・・・・ちゅうじ今のように。

「//コ・さま！…お待ちなさい！…模擬刀を持ち出してはいけないとあれほど言つたでしょ！…」

刺繡の時間を抜け出して鍛練をしていた所を乳母に見つかった私は脇目も振らずに全力で逃げていた。

と、言うか何故あんなに爆走してゐるにスカートはめくれないんだ？足だって殆ど上がつてないし、はたから見たら淑女らしい振る舞いなのにどうして全力疾走の私に追い付かんばかりの速さで追い掛けて来れる！

「ミリ・さま！…」

「いへやへー！」めんなさいーーーーー

そしていつものように追い掛けっこに負けた私の涙混じりの叫びが  
庭に響いた。

前世、”俺”はどこの誰が生んだかわからない、裏路地に捨てられた孤児であった。

だから家族なんていたことない。主たる人に拾われるまで生きるためならスリでも残飯漁りでもなんでもやつた。

正直、主に出会わなければ”俺”はろくな人生を送れなかつた。

敬愛しても仕切れない主が今は自分の実父。

恐れ多いやら歡喜で踊りだしたいやら私の内心は忙しい。

「おとうさま～～～！おかえりなさいませ～～～！おじい」とおつかれさまです～～きょうのしょくじはあつさりぱすたですよ～～あ、おふろもわいてます～～ああ～～それよりもおへやでゆつくりひとりいきですか？それとも・・・！」

帰つて来られたお父様に猪の如く突撃した私はお父様を見上げながら怒濤の勢いでかいがいしくお世話をする。

そんな私を乳母は窘め、お母様は「あらあら～ミリ・つたら本当にお父様が大好きなのね～～」と柔らかな笑みを浮かべていた。

お母様！私はお父様と同じぐらいの尊敬と敬愛を貴女様に抱いておりますよ～～

「おかあさまもだいすき～～～！～～～！」

きゅう～～～と抱き着けば「お母様も大好き～～～！」と抱きしめ返

してくれる。

「む、私も一人に負けないぐら~い大好きだぞ? 勿論ここにない息子のこともな!」

お父様の大きな腕が私達を包み込んでくれる。

「だいすき!」「大好きだぞ~」と抱きしめ合い笑い合ひつ家族の姿に乳母が呆れたように手を叩いた。

「はいはい。玄関で家族愛の確認はおよしになつてくださいな」

乳母の言葉にお父様は私を片腕に抱き上げお母様の肩を抱き寄せる。

「素晴らしい家族と愛を確かめ合ひつのは食事が終わつてからでもいいか」

「おとうさま~きょうのばすたはほんとつじおこしかつなのですよ! わたしたのしみ!」

「ふふ、ミリ~は本当に食いしん坊さんね」

優しい家族。当たり前のように笑い、抱きしめられる優しい時間。それは当たり前のようですが、くすぐりく大切な奇跡なのだと”俺”的記憶が教えてくれる。

私は記憶の中で一人うずくまる灰色の髪の子供を抱きしめるようにお父様の首にしがみついた。

?

たまに前世の記憶が夢に出て来ることがある。  
それは断片的で泡のように浮かんでは消えていく。

今夜もまた、私は夢を見る。

誰も知らない。歴史にも記されなかつた一人の男の記憶を。

『わたくし、狙つた獲物は必ず仕留める主義ですの』

婉然とした笑みを浮かべつつ彼女は容赦なく己の得物を”俺”に向かってしならせた。

思い出したくもない記憶は鮮やかで余りにも現実味を帯びていた。

そう、顔の側を掠める鞭の音や避け切れずに打たれた痛みだとあの女の高笑いまで克明に夢に出て来て私の心が恐怖感で一杯になる。艶やかに微笑みながら容赦なく鞭をふるう女。

壁際に追い詰められた”俺”の頸を鞭の柄であげる。美しい、だけ

ど加虐心に満ちた顔が吐息がかかるほど近くに寄せられた。

『さあ、諦めてわたくしと結婚しなさい。即、子作りに励みますわよー』

綺麗な顔して何言つてんだ。お前は - - - - !

『『やめんかー』』

夢の中の”俺”と現実の私の台詞が綺麗に重なる。

荒い息を吐きながら私は飛び起きたままの状態でしばし茫然としていた。

「あ、あくむだ・・・」

呻いて頭を抱えた私は暫く動けなかつた。

夢見が最悪だつたため今日の気分は最低だ。

珍しくぶすつとした顔で黙つてパンを食べる私にお父様もお母様も給仕の使用人達までもが困惑した様子で顔を見合わせていた。

「ミコ・？随分と機嫌斜めなようだが何かあつたのかい？」

食後の紅茶を飲みながらお父様が私に尋ねてきた。  
不機嫌な顔のまま視線を上げれば心配そうに私を見る顔、顔、顔。  
同じテーブルにつく両親は勿論、数人いる使用人ですら判を押した  
ように同じ顔で私を見ていた。

私は周囲の人間にこんな顔をさせるほどの態度を取つていたのか。  
羞恥にかられ私は紅茶をソ・サーに置くと顔があげられずに俯いた。

「ミコ・？」

優しいお父様の声に促されて恐る恐る顔をあげると優しい両親の微笑みがあつた。

「あの、ごめんなさい。すゞくいやでこわいゆめをみたの・・・だ  
れかになにかいやなことされたとかじやないの。しんぱいさせてご  
めんなさい」

心からの誠意を込めて私はその場にいる全ての人に頭を下げた。

「顔を上げなさい」

「おとうさま……」

「お前はまだまだ子供なんだから周りの大人にもっと甘えてもいいんだぞ。怖い夢を見た時は遠慮なく私達に泣き付きなさい。添い寝だろうが文句だろうが受け入れる準備が私にはあるぞ」

気付けばすぐ近くに立っていたお父様の大きな手が優しく頭を撫でてくれる。

ワインクなどしながらもつと甘えてもいんだと黙つてくれるお父様に私は勢いよく抱き着いた。

「まあ、お父様ばかりニコニコ・を独り占めしてずるいですわー・わたくしも……あら?」

「奥様!」

「ずるい!」と口を尖らせながら立ち上がるとしたお母様が椅子に足を引っかけ、身体がぐらつく。使用者が悲鳴をあげ、私とお父様が慌てて駆け寄る中で。

「ひゃん!」

お母様は顔から地面に倒れた。

一瞬、確かにこの場に流れる時間は止まつた。

お母様は夢のように綺麗でとつても優しくて、でもお父様のお仕事の補佐までする才女でもあり私の憧れで尊敬する女性だけど……。

「全く、昔からそそつかしい所は変わらないな」

そう、お母様は超がつく程鈍く……いや、どじ……いやいや、人より少し、ほんの少しだけ、物にぶつかつたり、顔面から転んだり、階段を踏み外したりすることが多い人なのだ。

前世の、奥様、もよく転んだり、ぶつかつたりしていたからこれはもう、魂に刻みつけられているとしか思えない。

奥様に何かある度に主が飛んできて助け起こしていた。

今、涙目で座り込むお母様をお父様が心配そうに抱き起こすように。

そんな一人の姿にふと、前世の一人が重なつて見えた。

違う姿、もう、私以外だれも覚えてない遠い昔を精一杯生きた人達。

そして、彼らは忘却を与えられ、新たに生まれた今を生きている。

何故だらう。一瞬だけ一人、置いて行かれた気分になつた。

脳裏に戦場に一人立つ灰色の髪の男の悲しい横顔が浮かんで消えた。

?

そわそわ。

「…………」

キョロキョロ。

「…………」

モジモジ。

「…………//こ・かも。落ち着いてください」

「え?」

乳母の呆れたような声に部屋をウロウロしつつ窓の外をチラチラ気にしては自分の恰好を直していた私は漸く足を止めた。

「あ、こめんなさい」

「全く。若さまだが久しづりに」隠れられるの嬉しきのはわかりますが淑女たるもの……」

「ましゃのおとーおここれまがかえつてきたー」

「あ、//こ・かもーー。」

何やうに言いかけていた乳母をよそに馬車の音を聞を付けた私は部屋

を飛び出した。

着慣れないとつておきのドレスの裾がふわりと翻る。

帰つて來た。帰つて來た。お兄さまが帰つて來た！！

騎士団に入った五つ上のジョイお兄さまと逢つのは實に一年ぶりなのだ。私の浮かれつぶりも仕方ない。

見慣れた廊下を走り、驚いた顔の使用人達の側を走り抜け、玄関ホールが見える階段の上に辿り着くと既にお父さまとお母さまが揃つていた。

嬉しそうなお父さまの陰からじょじょとお兄さまのヒョウ色の髪が覗いているのを発見するなり私の心が歡喜で踊る。

「…………！」

それを認識した途端、私は脇目もふらずに全力疾走で階段を駆け降りた。わずかな距離がもどかしくてドレスの裾がめくれるのは無視だ。

「おかえりなさいませーおにこさまーー」

最後の数段を飛び降りた私は啞然とする一堂の脇を摺り抜け、懐かしいお兄様の胸に飛び込んだ。

頭上から息を飲む気配がしたが久しぶりの再会に気分が昂揚していいた私は気付くことなく擦り寄る。

わあー久しぶりのお兄様だーー一年前に比べて随分と逞しくなられ

て！私の腕が背中に回らない。

それに……何やうやい香がする。お香かな？爽やかだけどちょっとお兄様のイメージとは違つ。

生まれて十年。前世を合わせればそれ以上の付き合いが囁いた。何がが違うと。

違和感に固まつた私の頭上で「くすり」と笑う気配。と、いつか……頬がお兄様じゃない！

慌てて離れようとした私だが伸ばされた腕にがしりと拘束され、再び腕の中。

あ、あれ？ なんで？ ビーッ！

逃がさないといわんばかりに私、抱きしめられひやつているのでしょうか？

ガチガチに固まつたまま、ギギッと顔をあげれば私を拘束する見覚えのない少年の麗しいご尊顔。

歳はお兄様と同じぐらい。お兄様より薄い金の髪に濃い柘榴色の瞳をしている。思わず目が奪われるほどの美貌をもつ少年だったが私は全く別の理由で彼から目がはなせない。

なんで？

疑問だけが胸中で盛大に沸き起つ。

なんで、どうして……！

私を捕まえる腕も、姿も声も……性別さえも違つたば……間違つわ  
けない。この少年は！？

目が合つた途端、少年が笑う。

艶やかに獲物に狙いを定めた野生の獣の如く獰猛に。

…………その笑みに前世の”彼女”の面影を見出だしてしまった

私は。

「い、いやああああああああああああ……！」

心の底から恐怖した。

僕の友人であるジエイは変わり者だ。

家柄よし、顔よし、才能あり、将来性十分のモテル要素の塊のよつな友人だが僕は彼の婚期はかなり遅いと見ていく。

理由？それは簡単さ。

「あ、聞いて聞いて……ミリ・から手紙が来たんだよ・！」

頬を赤く染めて、ウットリと妹（十歳）の手紙を抱きしめぐるぐる歓喜の踊りを披露する妹至上主義男についていける女性はそういうからや。

「でさあ～その時のミリ・がもつ、殺人的なまでに可愛くて可愛くて～！」

デヘヘと緩みきつた笑顔で口を開けばミリ・がミリ・ニミリ・は……正直、ウザイ。

どれだけ、君、妹が好きなの？

毎日ミリ・を連呼するから興味もないのに彼の妹について詳しくなる。

「はいはい。君の妹が可愛いのは聞き飽きたよ」

「なに？……まさか、うちの可愛い妹を狙っているんじゃなかろう

な？」

軽く流そうとしたら何故だか無表情、本氣の声色で凄んでくる友の将来が少し、不安だ。

まあ、妹のことさえ絡まなければ良い友人である。騎士見習いとして一年が過ぎた頃に迎えた初めての休暇に彼の実家に誘われる程には僕らは友情を深めていた。

……僕が実家を嫌っていると知っているジェイがお節介を焼いた、とも言ひ不得。まあ、僕としてもあの場所に帰らなくていいのは助かる。

ジェイの実家に向かう馬車の中で彼の妹と談議に適当な相打ちを返す僕の腕の中に数時間後、一目で惹かれた少女が飛び込んでくることになるとは思いもしなかった。

幼女趣味はなかつたはずなんだけどなあ。

なんて思いつつ案外すんなり自分の気持ちを受け入れた僕を少女が恐る恐る顔をあげる。

董色の綺麗な瞳と視線が絡む。

心が、魂が震えた。

が

少女と目が合ひうなり恐怖の雄叫びをあげられてしまった。

……なぜ？

これが僕の愛難な恋の始まりであった。

?

前世で結んだ縁とは切れないものなのだろうか？

“俺”は、彼女“の生まれ変わりと関わるつもりなんて、なかつたのに……私は彼と出会ってしまった。

前世でトラウマ級の求婚をして人を追いかけ回し、そして“俺”が死んだあの戦場に共に立つた、彼女“。

“彼女”は、俺の恐怖の象徴だ。

逢いたくなかった。誰よりも何よりも、姿も知らない、あなたに逢わないことを願つていた。

「あはは、」口ににおいて

「フウウウウ……」

ノラネロを餌付けする少年の図……ではない。

お兄様の背中にしがみつき威嚇する私に笑顔で手招きする幼女趣味男の図だ！

「怖くない。怖くないからおいでの

「キシャヤヤー！」

「一体なにをしたら人語を忘れるほど警戒されるんだ？」

「違うよ。これは照れだよ。全く照れ屋さんだね。僕のミリ・は爽やか笑顔でさりげなく所有権を主張した少年に私とお兄様が同時に吠えた。

「だれがあ、お前のミリ・だ……ミリ・は俺の天使だあ！」

「フギヤアアー……」

「コイツ、昔（前世）から変わってねえー！ 思わず前世の言葉使いがでた。

「なんだ？なぜ、前世も現世も出会ったその瞬間から私に狙いを定める！」

嫌がらせか？人生二回分の盛大なる計画的犯行か！！

よそを見ろ！調度いい年頃の娘さんは沢山いるぞ！！

狙うなら私以外にしてくれーー！

余りにも予期できぬ出会いと過去をなぞるよつた展開に人話を忘れるほどのショックを受け、盛大に口喧嘩をするお兄様の背中で唸る私はこの人生でも”彼”と嫌がらせのように関わることになるなんてちつとも知らなかつた。

?

男だった前世。“彼女”の度の過ぎた求愛行動その他諸々にウンザリしたし、恐怖した。

だけど、今、女の身で同じことをされたら……想像したら恐怖しか残らない。

こえー！男の行き過ぎた求愛行動こわすぎー。

前世は体格や力で勝つてた分何かされても抵抗できるって安心感が心のどつかにあつた。

でも、今は……（自分の身体をみる）……ダメだ！！勝てない！

力もあつちが上で年齢だって五歳も違う。

男と女の違いをまざまざと突きつけられた気分だ。  
正直、へこむし悔しいし怖い。

彼に本気で捕まえられたら振りほどくことすらできないであらう自分の身体と弱さに。男であつた記憶があるから余計に女の……子供の身体がもどかしく感じる。

強く在りたい。

なのに力強い腕も激しい動けるだけの体力も私は持つていなかつた。

「ミコ・は本当に可愛いな～。ねえ、僕の子供生まない？」

ガチャン！！

出会つて一日目の朝食の席で敵はとんでもない発言で空氣を凍りつかせた。

使用人は一様に目を丸くし、お母様は焼きたてのパンの方に気を取られ、お父様は大人の余裕で笑みを深めて息子の友人を見つめ、ソーセージを食べていたお兄様は反射的に怒鳴ろうとして食べていたソーセージが器官に入り咳込んだ。

そして私は突然の悪魔の言葉に青ざめた。震えが持つっていたスプーンに伝わり力チカチと耳障りな音がしたが止められなかつた。

私の中で灰色の髪を搔きむしりながら”俺”が「ありえねえ～ぜってえにありえねえ～～～～～！」と謫言のように繰り返す。

『オ～～～ホホホホッ！！』

高笑いしながら見事な鞭捌きで追い掛けてきた”彼女”の顔と田の前で麗しい笑顔を向けてくる”彼”の顔が重なる。

全然違う顔なのにそこに浮かぶのは私を逃がさないという確固たる意思。

「ななななな、にやにを！！」

動搖と恐怖の余り、噛んだ。

「かわいいなあ～～～」

「ひつ！」

熱い瞳で見るな！甘い顔をするな！

フルフルと震えた私に更に笑みを深める彼。  
なぜだ！

救いを求めて私は視線をさ迷わせた。

?

助けを求めてまずお母様を見る。

「うーん！焼きたてクロワッサン、サイダーにおいしい～～～！」

母はパンに夢中でした。

つ、次はお兄様！お兄様なら助けてくれるはず！

「ぐはっ、なにい…… ゲホゲホゲホツ ! ! !」

盛大に咳込んで使用人に背中を摩られていた。

い、  
一家の大黒柱！お父様！

縋るように見れば全てを受け入れる父性溢れる笑顔のお父様。

## 救世主がいた！！

うるうると感激で目が潤む私にお父様は力強く頷いて下さった。

「ラードン君」

「他人行儀ですよ。フエイって名前で呼んで下さい。お義父さん」

ヒイイイーー? もへ、「お義父さん」呼ばねりしてゐーー。

「この中で私の位置付けがどんなことになつてゐるのか感ずる。

動搖し、責める私をよそにお父様は余裕の笑みで彼のざれ言を受け流す。

「お父様と呼ばれるとは光榮だ。//コ・に兄が増えたよ。ねえ、//リ・もそう思うよね」

彼の発言を軽く聞き流した上に寒の息子扱いで私への変態求婚すらなきものにされたお父様、流石です。

「ククと必死に頷く私に一瞬、彼の動きが止まる。言外に却下された彼が見せた動搖しきものはその一瞬だけで、すぐに嘘くさい爽やか笑顔を浮かべた。

「僕は妹がないからいつも言つて頂けると嬉しいですよ」

ヒヒヒヒヒ。

幸せそうにクロワッサンを食べるお母様と今だに咳込みから回復しないお兄様を除く三人はお互いに笑い合つた。

若干、あたしの笑みは引きつっていたが気にしない！

?

嘘くさい爽やか笑顔を浮かべた彼はヤツパリ油断ならない男でした  
……（涙）

にこにことうそ臭い笑顔を浮かべる少年の視線が私の方に向く。  
びっく！と見るからに震える私にますます笑みを深めつつ少年はフ  
ォークにベーコンを刺すと当たり前のように私に差し出す。

「、これは。

世間様で言つ所の「はい、あーん」という甘酸っぱくもどきどきな  
甘い行為だと悟り、意識が飛びかけた。

口を開けて魂を飛ばす私に敵はにこにこと笑いながら「妹ができた  
らひつやつて食べさせてあげるのが夢だつたんだ」と言つていたが、  
絶対に嘘だ！

策略だ！陰謀だ！よこしまな想いが私には透けて見えている！

「ミコー？」

フォークを差し出したまま「ほら」と笑顔で齧し、いや、促す少年。

い、嫌だと目で訴えても笑顔でじり押しされて撃沈。

あつあつと口を開閉させて涙目で周囲の助けを求めるが・・・。

「げほげほ！」

「もぐもぐ」

「ぐつ！」

いまだに咳き込む兄に幸せそうに食事を続ける母に「兄妹」発言をしたため口出しえきないらしい父。

## 助け皆無！

「うーん、飯が冷めちゃうよ?」

ええい！」）は腹を括る！戦場で敵に特攻するかのような心境で私は身を乗り出し勢いよく「はい、あーん」を受け入れた。

私は見てない。  
なんて見てない。  
蕩ける様な瞳で私に恍惚の視線を向ける少年の姿な

かじつにかべー「ンを壁下した。

はあ・・・・これで・・・・おわつ。

「はい。あ～ん」

• • • • • • • •

一回で終わらせてくれるほど甘くないですかね。一回で終わらせてくれるほど甘くないですかね。

甘い甘い笑顔で少年がすかさず差し出してきたフォークに私は涙を止められなかつた。

結局、「兄妹みたい」に仲良くしよう」を免罪符にされ食事が終わる  
まで「あ～～ん」を付き合わされた。させられた。最後の方は膝抱  
っこまでされた。・・・っていうかそこまでする兄妹がいるかあ！  
！（超意訳）と云んだがなぜだか実の兄が「いや～おに～ちゃん  
はいつだつてミコーを膝抱っこして「あ～～ん」をしたいぞ～！」と  
馬鹿発言し、「だつてや、はこ～ミコー「あ～～ん」とますます奴  
を付け上がらせた。

お兄様のお馬鹿~~~~~

その時間は文字とおり悪夢のような時間だった。・・・・・。

食事を終え、速攻に自室に逃げ帰りベットにもぐりこんで私は悪夢の時間の終わりにむせび泣いた。

「ふふ。次の食事が楽しみだな～～～」

食堂においてそんな危険発言がされていたなどちつとも知らず、私は安堵するやら羞恥に転げまわるやらせわしなかつた。

? (前書き)

前世の話な上シリアルです。

?

激動に揺れ動いていたあの時代。誰もが何かと戦っていた。それは人それぞれ違う。剣を持たない生きるための戦いもあった。剣を持ち敵と命のやりとりをする戦いもあった。

これは、戦場で戦つた者たちの記憶。

後に英断を下した英雄として名を残すことになる男と戦場で命を散らすことになる名もなき男が戦場で対峙していた。

英雄は侵略者として、男は祖国を守る名もなき兵の一人として。時代を動かした男。戦場に散つた男。

だが、本当の意味で歴史を動かしたのは……。

『……これ、で……すぐには、うう」け、ねえ、だろ?』

『お前は……』

交差した剣は一人に数段は動けない傷をそしてもう一人には致命傷を与えていた。

灰色の瞳が満足そうに驚愕で目を見開く男を見つめる。

『へへつ……これ、で攻め込むのは、遅れる、だろ?』

『おろかな、いくら俺の足を止めようとも戦局は覆らん。貴様の祖国は滅びる。それにこの程度の傷ならせいぜい三日あれば動ける』

男の言葉に灰色の名もなき兵はただ笑う。

『三日、か……。それで、十分だよ。三日もあれば、あの人なら、  
あの人達なら……きっと、最良の道を選んでくれる。俺の……い  
や、この戦場で散った命全てが生み出した時間、決して、無駄、し  
ない』

言葉を吐ぐ」と云つて、そつと命が零れてこゝよつた。それでも、  
兵は言葉をつむぐことをやめない。

文字とおり血を吐きながら兵は命の代わりに想いを伝える。この戦  
の無道を一番知りつつも心のまま弾劾することも止めることもで  
きずにいる男の背を押すように。

『あんたは……いいのか？ほんとう、ここのまま、愚王の意の  
ままに、動いて……戦いを、とめない今まで』

『なにを……』

『しがらみ、も立場も、忘れて、心のまま、動いても、いいんじや  
ね～か？迷いを抱えた、まま、壊すより、迷いを吹つ切つて守つた  
ほうが、よっぽ、じ楽だぞ』

ごほりと血の塊が兵の口から零れる。膝に力が入らずそのまま倒れ  
ていく。だが、その灰色の瞳はしつかりと男を見据えていた。

『男なら、てめえの心のまま、走れ！』

兵の言葉に男の身体が震える。迷いに揺れる瞳を睨みつけながら兵  
の意識は暗い深遠に落ちていく。音もなにもない永の眠りへと。

『やくそく、まもれなくて、すいません……』

後は頼みますと呴き、”彼”の意識は途切れた。

記憶が途切れ、夢が消え、そして…………同じ記憶を持つ一つの意識が目を覚ました。

「…………夢、か」

幼さを感じさせる声に似つかわしくない重みの籠つた呴きに外で控えていた従者が声をかけて来る。それに適当に答えながら部屋の主は小さくため息を零した。

同じ時、同じ記憶を夢に見たのは互いにまだ、幼い子供。

追憶を抱える一人はいまだ、互いの存在を知らない。

## 『滅』

手紙を開くと真っ先に飛び込んできたのは禍々しい赤いインクで殴り書きのような荒々しい筆遣いで書かれた文字。手紙を透けて裏側からでもその文字は認識できた。

恨み辛み憎悪嫌悪が濃縮されたが如きその一文字手紙に周囲にいた者達がざわめきながら手紙の受取人から一歩下がる。

不幸の手紙か？いやいやそんな甘いもんじゃねえぞ、あの手紙。脅迫状？いや殺害予告か？

様々な憶測が飛び交う中それまで固まっていた手紙の受取人がゆっくりと顔を上げる。その顔に浮かぶのは恐怖かそれとも怒りか。固唾を呑む周囲だつたが、彼の顔が確認できると同時に周囲はさらに遠ざかっていた。

いまや受取人の周囲はちょっとした結界でも張られたかのように人気がなくなっていた。

顔を上げた受取人の浮かべていたのは恐怖でも怒りでもなく色気たっぷりなそれこそ恋人から恋文でももらつたかのような蕩ける笑顔を浮かべていたからだ。

「わっ！」

ギャラリーの心が今、奇跡の一一致を見せた。

周囲を混乱と恐怖のどつぼ叩き落した受取人……フェイ・ラー

ドンはまるで愛おしい人に触れるかのように手紙を懐に納め、上機嫌で食堂を後にした。

鼻歌でも歌いだしそうなその背中を凍りついたギャラリー多数は見送るしかなかつた。

「……結局、あの手紙はなんだつたんだ？」

ぱつりと零れた誰かの疑問に答える声はなかつた。

### 『婚姻届』

氣色の悪い口説き文句の連なつた分厚い手紙と共に出てきた婚姻届を私は即座に使用不可能なレベルにまで細切れにした拳句、台所にまで走つていき目を丸くする厨房の面々をよそに赤々と燃え盛る竈に放り込んで灰にした。

「よしー。」

呪いの書類が灰になつたことを確認した私は再び走つて部屋まで戻る。机の上に便箋と以前趣味で貰い求めた異国の朱色の墨と筆。筆に荒々しく墨をつけると心に湧き起つる激情のまま筆を動かした。

### 『滅』

子供に婚姻届なんぞ送りつけてくる変態幼女趣味男は滅びろ!!

悪夢の日々が終わり、ようやくあの変態を追い出せたと思つたら毎日毎日毎日！－！－！手紙と共に婚姻届を送りつけやがつて－－！

私は知らなかつた。あの男が私の溢れんばかりの拒絶の手紙をまさか満面の笑みで受け取りあまつさえ加工し額縁に入れて部屋に飾つていることを。

「ミリーは照れ屋だなあ」「寂しさの裏返し」だと勘違いを爆発させているとか手紙を受け取るたびに悶えて喜んでいるとか。「己の所業がまったく相手に堪えておらず、手紙の返信なんてせずに無視するのが一番無難とはいわないが反応を示すよりかはよっぽど良い方法だつてことに私が気づくのはかなり後のことになる。

「こりもせずに送られてくる手紙＆婚姻届に憤りと怒りの雄叫びを上げる私に使用人たちは顔を見合わせ、またかと肩を竦ませると各自の仕事に戻つていった。

み、味方なんてほしいわけじゃないもん！！

涙目でいつものように婚姻届を抹消し、呪われそうなほど禍々しい手紙は鍵付きの専用箱の中に厳重に封印する。

う、見てくるだけでオドロオドロシイ。中身の方があつぱん感ひしけじな！

生まれて性別逆転してそんでもってあっちには記憶なんて全くないのにどうして今世でも「あいつ」のはた迷惑な求婚に振り回されなければならないの！

そういう星の元に生まれてるからじゃないの〜〜?

心の小人さんが囁く。が、私は認めない。認めないつたら認めない！

頭を抱えてうなる姿が前世の「彼」と全く同じだったりする」と  
を私は知らない。

ああ～～～私の平穏で幸せ一杯な人生に暗雲が垂れ込めてきた……。

これから的人生に「彼」がいやと言つほど関わつてくるであろうことを予想して私は本気で修道女になろうかと悩んだ。

なんで、いへ、物事は自分の思うとおりに進まないのだろうねえー  
ー。

「はあ.....」

十歳とは思えぬ重く低いため息は様々な感情が込められていた。主に遠くに離れていたながら存在感抜群なはた迷惑求婚を繰り返すフェンとかフェンとかフェンとか！！が原因なんだけどね.....！！

「ふ、ふふふつはははつ.....はあ~~~~~」

何とか気分を高揚させようとするとがどうにもあがらない。コテンと机に頭を乗せてつい数日前に届いた手紙をペラリと指に掴む。それは王都に住む父方の叔母からの手紙でありそこに書かれている内容が私の気鬱の原因だ。

「はあ~~~~~なんだろつ。どうしてだりつ。なんで、どうして.....」

関わりたくないのに。出会いたくなんてなかつたのに。どうして私たちは出会つてしまつたのだろうか。

近日中に私は両親と共に王都に住む叔母を訪ねることになった。それはとても喜ばしいのだけど問題は王都には「彼」がフィルがいることだ。

兄にも連絡は行くから私が王都に来ることをフィルが知る可能性は高い。（いくら隠そりとしてもあの兄はこと妹のことに関しては駄々漏れなことが多い）

また、玉会い。

彼に、  
彼女の魂を持つ人に、

胸に走る痛みに泣きたくなつた。

田を瞑れば鮮やかに思い出せる、遠く過ぎ去った日々。優しい思い出も辛く苦しい思い出も全てこの胸の中にある。

『彼女』の最期も私は覚えている。

『彼女』の命の終焉を見届けた『彼』の嘆きと後悔と悲しみも全部全部覚えている。

もう、動かない彼女を抱えてただただ『彼』は自問していた。

本当ならこんな血に手を汚すような女じやなかつた。大切に大切に護られ綺麗で優しい世界に生きるはずの女だつた。

こんな戦場で何の地位もない男を廻して殺される。シガーレイターがつた！

幸せに、そう、幸せになれるはずの女だつた。自分にさえ、出会わなければきっと、笑つて穏やかに伴侣や子供や孫に見取られて人生を全うしていた。

それを、『俺』が奪つた。

そう、悟つた瞬間狂いそうなほどの後悔が襲つた。

『俺』のせいたる『俺』が殺した!! 譲る」ともできずにただ『彼女』を戦場に死に追いやつてしまつた。

あの日、魂から叫んだ『彼』の慟哭を、『私』だけが知っている。

「だから……」

記憶が嘆ぐ。出逢ってしまったこと。また、同じことを繰り返すのかと怯えている。

「出会いたく、なかつたよ……きみにだけは関わりたくないよ……」

『彼』と『私』は違う。また『彼女』と『ファイル』も違う。

だけど、どうしようもなく怖い。刻まれた記憶と後悔、嘆きがありにも大きかったから。

『俺』が『彼女』の死の原因になってしまったように『私』が『ファイル』を死に追いやるような気がして……。

「いやこよ……」

隠せない怯えに私は震えた。

違うけど、ありとあらゆることが違うけど……それでも『彼女』の魂をもつ『彼』と関わることはとてもなく、怖かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3157q/>

---

遠い日々への追憶

2011年9月21日00時58分発行